

更新世から縄文・弥生期にかけての日本人の変遷に関する総合的研究

溝口 優司 (国立科学博物館 人類研究部 室長)

【概要】

20世紀末から、新人(ホモ・サピエンス)の進化史を取り巻く学問状況は大きく変化してきている。世界では新人のアフリカ起源説を補強する結果が数多く発表され、日本では捏造問題に端を発した旧石器の再検討に伴って更新世人類化石の真偽も検討を迫られている。また、弥生時代の開始時期が従来の説よりも数百年さかのぼる可能性が指摘され、これまでの縄文～弥生移行期の概念が大きく変わりつつある。本研究はこのような状況をふまえ、形態と遺伝子のデータに基づいて、更新世から縄文～弥生移行期まで、日本列島住民の身体形質がいかに変化したかを明らかにし、新たに日本人形成過程のシナリオを構築することを目的としている。具体的には、1)日本のいわゆる「更新世人骨」の更新世人骨としての妥当性の検討、2)形態・DNA双方からの縄文時代人の系譜推定、3)渡来系弥生時代人の数の再検討、4)縄文・弥生集団間の形態的断絶性の再検討、等々を行なう。なお、本研究の特色は、1)形態学と遺伝学の研究者が連携して、2)日本人形成の鍵を握る更新世から弥生時代までの期間に的を絞り、3)形態とDNAの変化の原因までも明らかにしようとするところにある。

【期待される成果】

目的である日本人形成過程のシナリオ構築が、蓄積された古人骨資料と新しい形態・遺伝分析技術によって、これまでよりも格段に真実に肉迫したものになるだろうことが期待されるのは当然として、最新鋭のマイクロCTによって得られる骨構造の立体計量データは、今後、形態学の新たな研究領域の基礎になるものと思われる。また、大量の古人骨から直接採取されるDNAデータは、これまで主流であった現代人DNAのみの分析からは知り得なかった事実を明らかにし、古DNA人類学とでも言うべき研究領域の発展に寄与するのではないかと思われる。

【関連の深い論文・著書】

Mizoguchi, Y., 2004. Associations between the neurocranium and the foot bones: Toward the solution of the brachycephalization problem. *Bulletin of the National Science Museum, Tokyo, Series D*, 30: 9-36.

Mizoguchi Y. 1992 An interpretation of brachycephalization based on the analysis of correlations between cranial and postcranial measurements. In: *Craniofacial Variation in Pacific Populations* ed. T. Brown and S. Molnar. Anthropology and Genetic Lab., Dept. of Dentistry, The University of Adelaide, Adelaide. pp. 1-19.

【研究期間】 平成 17 ~ 21 年度

【研究経費】 76,900,000 円

【ホームページ】 <http://svrsh1.kahaku.go.jp/jinrui/anth1e.htm>